

【開館60周年記念】

Re:スタートライン 1963-1970/2023

現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係

このたび、京都国立近代美術館は2023年4月28日（金）から7月2日（日）まで「開館60周年記念 Re: スタートライン 1963-1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」を開催いたします。

「現代美術の動向」展*は、京都国立近代美術館が開館した1963年から1970年まで毎年開催された、定点観測的なグループ展シリーズです。国公立の美術館がまだ少なかった1960年代当時、日本の現代美術の中堅・若手作家を紹介する展覧会として大きな注目を集めました。

全9回におよぶ「動向」展が取り上げた作家・作品は、素材や形式も実にさまざまです。高度経済成長期を迎えた1960年代は、社会や人々の生活の変化を背景に、絵画や彫刻といった既成の区分の逸脱と、形式・素材の多様化が進み、美術の概念そのものを刷新する動きが活発化した時代でもありました。抽象絵画、ネオ・ダダ、ポップ、キネティック、コンセプチュアル、ハプニング、もの派など、今日の「現代美術」の表現言語の多くは、まさにこの時期に生み出されたと言えるでしょう。

「動向」展は、美術館がこうした目まぐるしく変貌する美術の状況と向き合い、若い世代のアーティストや鑑賞者との共感にもとづく実験場となるべく創始されました。美術館の建物を用いたその場限りのインスタレーションやハプニングなど、関係者の記憶や記録写真だけが頼りの作品も少なくありません。今回の展覧会では、293組の出品作家の中から、66組による主な出品作もしくは関連作、記録写真、展覧会に関するアーカイブ資料を紹介しながら、1960年代当時の美術館とアーティストが切り結んだ美術の現場のスタートラインを検証します。

*1963年に「現代絵画の動向」という展覧会名で開始されたが、1964年から「現代美術の動向」展へと改められた。

みどころ

1960年代日本のアートシーンのトレンドを辿る展覧会

「現代美術の動向」展は国内の最新の美術の動向をいち早く関西で紹介し、さらに京都周辺在住の若い世代の気鋭作家を積極的に紹介することで、当時、関西と東京のアートシーンを一望する格好の機会でもありました。作家選出には、画廊での展覧会のほか、同時代の毎日現代日本美術展、シェル美術賞といったコンクール展やグループ展で注目された作家が取り上げられました。今回の展覧会では、京都に位置する美術館による1960年



田中敦子《Work '63》1963年 当館蔵
©Kanayama Akira and Tanaka Atsuko Association



李禹煥《現象と知覚 A 改題 関係項》
1969/2022年
国立新美術館での展示風景（2022年）撮影：中川周



宇佐美圭司《アクション・フィールド》
1964年 国立国際美術館蔵

代美術の定点観測の結果をトレースすることで、これまで一般的に知られている1960年代美術史とは異なる状況を浮かび上がらせます。

「動向」展が創始されてまもない1963年・1964年展は、1950年代の前衛として知られる具体美術協会やパンリアル美術協会等による、身体性と物質性を強調したアンフォルメル、抽象表現主義の絵画が主流でした。一方で東京を中心に高まりを見せていた荒川修作や中西夏之らネオ・ダダによる反芸術的傾向を関西でいち早く紹介しています。1965年・1966年頃には、中馬泰文や岡本信治郎、森本紀久子などの緻密で幾何学的な描写やマンガ的表現が増え、次第に絵画の傾向も変化していきます。オノサト・トシノブ、宇佐美圭司といった海外でも活躍する作家も、数回にわたり「動向」展に出品しています。

工業素材の使用や、「絵画」や「彫刻」といった既成の枠組みを逸脱する表現が顕著になったのが1967年・1968年展です。福嶋敬恭や榊健などがアメリカのプライマリー・ストラクチャーの展開とも比較しうる、展示空間を占有するインスタレーション的作品を発表して注目を集めます。1970年の大阪万博で結実するメディア・アートの先駆的作品ともいえる、吉村益信やヨシダミノル、河口龍夫、山本圭吾らによるネオン管やブラックライトなどを用いたキネティック作品も積極的に紹介されました。

1969年・1970年展では、素材や物質を、あまり手を加えずにそのままの形で提示する、いわゆる「もの派」的傾向が急増します。1969年参加作家の李禹煥の言葉「何人かのイメージ作家風の芸術家を除いて、でき上がった作品なるものを持参してきている者はほとんどいない」に象徴されるように、美術館の展示室が「創作の現場」となり、形が残らない作品が多数出品されました。

現在の巨匠たちの原点、新人時代を振り返る展覧会

当時の関係者の証言によると、「現代美術の動向」展に参加することは、若手作家たちにとって一つの目標だったといえます。陶芸作品で知られる三島喜美代の初期のコラージュ絵画や、「環境芸術」という概念を提示した創作で知られる山口勝弘が一時期手がけた布張り彫刻、そして李禹煥による岩の作品に象徴される「もの派」的動向、ザ・プレイによるハプニング作品など、今や伝説となった作品のルーツを知ることができます。

コレクション展での関連展示

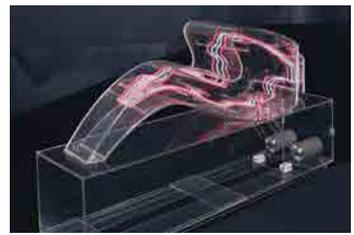
所蔵品にみる「現代美術の動向」展

当館4Fコレクション展では、関連展示として、当館が所蔵する「動向」展の出品作家（吉原治良、白髪一雄、難波田龍起、磯辺行久、堂本尚郎など）の作品の中から、選りすぐりの作品を紹介しています。

芸術とは何かを考えさせる、ふたつの問題作

一赤瀬川原平《模型千円札》 マルセル・デュシャン《泉》

また、コレクション展の別コーナーでは、美術概念の定義が大きく書き換えられることと



吉村益信《Queen Semiramis II》
1966年 東京都現代美術館蔵



ヨシダミノル《Just curve '67 Cosmoplastic》
1967年 高松市美術館蔵



三島喜美代《Work-64-I》1964年 当館蔵

なった1960年代を考える上で重要な二つの問題作を紹介。美術と社会が法廷で対峙することとなった赤瀬川原平の《模型千円札》、そしてアルトゥーロ・シュワルツによって再制作が行われたマルセル・デュシャンの《泉》をはじめとするレディメイドのセットを展示します。

関連イベント

連続アーティスト・トーク

4月29日（土・祝）午後2時～ 河口龍夫（1968年動向展 出品作家）

5月20日（土）午後2時～ 松本陽子（1966年動向展 出品作家）

7月1日（土）午後2時～ ザ・プレイ（池水慶一・三喜徹雄／1969年動向展 出品作家）

講演会「京都発・現代美術」

6月17日（土）午後2時～ 富井玲子（美術史家）

ギャラリートークをインスタライブで配信

5月2日（火）午後6時30分～ 牧口千夏（当館主任研究員・本展担当者）

笠原恵実子によるレクチャー&ワークショップ「アフター・リチャード・セラ」

レクチャー 5月13日（土）午後2時30分～、

ワークショップ 6月3日（土）午後1時～

※各イベントの詳細は当館HPをご確認ください。

Re:スタートライン 1963-1970/2023

現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係

会期 2023年4月28日（金）～7月2日（日）

会場 京都国立近代美術館 [岡崎公園内]

開館時間 午前10時～午後6時（金曜日は午後8時まで）

※入館は閉館の30分前まで

休館日 月曜日

主催 京都国立近代美術館、京都新聞

観覧料 一般1,200円（1,000円）、大学生500円（400円）

※（ ）内は前売と20名以上の団体および夜間割引（金曜午後6時以降）

※ 高校生以下、母子・父子家庭の世帯員の方、

心身に障がいのある方とその付添者1名は無料（要証明）

※ 本料金でコレクション展もご覧いただけます

お問合せ

「Re: スタートライン展」

広報事務局（ネネラコ内）

Mail art-pr@nenelaco.com

Tel 06-6225-7885

Fax 06-7635-7587